

# 紀伊国府の所在について

大岡 康之

## 要 旨

これまで、和歌山県下の南海道駅路のルートの復元を試みてきたが、南海道を含む駅路は都と各国の国府を結ぶ性格上、各国の国府と無関係ではいられないものであることを痛感した。紀伊国府跡については府中説をめぐって歴史地理学の分野を中心に研究が進められてきたところであるが、確定には至っていない。ここでは先学の研究成果に学びつつ、南海道駅路のルートや最近の考古学の知見を併せ、空中写真を活用しながら紀伊国府跡の所在に迫りたい。

## 第1章 はじめに

駅路—中でも南海道駅路のルート—の復元に関心をもち始めたところ、駅路は中央と地方を結ぶ交通路であることから、地方の中心都市である国府の所在は駅路の復元にあたって避けて通ることのできない重要なテーマであることを痛切に感じた。国府の所在及び規模、構造が明かとなってはじめて駅路の復元が可能となると言っても過言でないほど国府の解明は重要であったのである。

小生の研究対象とする南海道駅路は都から紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予・土佐の南海道諸国を結ぶ交通路で、時期及び都の位置等によりルートにいくつかの変遷が知られている。特に都が大和にある時期で、わが国の律令制が最も盛行する奈良時代における南海道駅路の復元に取り組んでいるが、平城京のある大和から最初の国である紀伊における国府の所在が確定していないが故に紀伊国府周辺の南海道駅路についても暗

中模索の状態が続いている。

そのような中で、紀伊国府の所在の確定は大きな課題であるとともに、南海道駅路の復元への足掛かりとなることから、紀伊国府の所在についてこれまでの研究を整理し、新たに地上に残された痕跡を手懸りに紀伊国府の所在の探求を試みたい。方法論的にはこれまで地形図から紀伊国府の位置に迫ろうとしていたが、地形図からこぼれ落ちた情報は少なくないことから、近年容易に閲覧が可能となった空中写真を利用し、その痕跡から紀伊国府の所在に迫ろうとした。国府は後述のように一定の規格で構成されており、相当な土木工事が行われているはずであり、何らかの痕跡が残されているはずである。地形図から漏れた情報を空中写真から拾い集め、紀伊国府の所在の解明に繋げていきたい。

## 第2章 国府の立地・規模・構造

国府についてはこれまで歴史地理学の分野で主に研究されてきており、近年は考古学の分野である発掘調査の成果により、次第に概要が現れつつある。

古くは米倉二郎氏が「各国府の位置、規模、遺跡等に相共通するものが甚だ多い」として、次の特徴をあげている<sup>(1)</sup>。

### ① 国外国内の要衝を占める。

特に都との連絡が重要であり、駅路に沿う場所を占地している。水陸交通の兼備している河川、湖海に近

接。何らかの理由で国府の位置が移転する場合もある。

### ② 都と同様地形

都と同様に背後に山を負う平坦地で、全面に平野・河川がある。

### ③ 水資源の豊富な位置。

国内の最大集落として飲料水が確保できる場所。

### ④ 方八町の条里地割

周囲に土堤が廻り、四隅に小祠が配置された。

### ⑤ 地名

御館・御所等の国府関連地名が伝わり、都の大学に対して国学が置かれ、また、軍隊が置かれた場所に団という字名が残る。さらに、国府近くに国分寺・国分尼寺が建立された。

ここに掲げた国府の特徴は米倉氏が30余か国の国府跡を踏査して導き出したもので、全国の国府は一定の共通した規格とでもいえるような特徴を有していることを指摘した。

太平洋戦争を経て戦後四半世紀が経過し、米倉氏の研究をふまえ、国府研究を全国規模で一定のまとめを行ったのは藤岡謙二郎氏で、国府の規模や構造等についてその概要を述べるとともに、全国各地の国府跡について個々に紹介している<sup>(2)</sup>。以下、同書から国府の概要をみていきたい。

国府の立地に関して藤岡氏は「一般的にみて国府の設定をみた地域は通常大化前代における文化・政治の中心地域であり、それぞれの国での、みのり豊かな生産の場であり、海陸両様からする交通の焦点、かつは結節点であったと誤りがない。」とっており、いわゆる当時の国の中心地であったことはだれもが納得するところであろう。しかし、「郡家の設定地とも関係して、国府が国の偏心的位置を占める場合もある。また信濃のように国の中に多くの盆地が存在する場合には米倉二郎がのべているごとく移転することが多いのである。しかしもともと国府は国の政治の中心であったから、中央政府からの命令が最も伝達しやすい、交通に便宜な国の中央位置を占有することを理想としたことはいうまでもない。」と述べ、地域の力関係の均衡を考えた選地や国府自体の移転があったことを指摘し、それでもやはり中央政府との連絡が容易な地域の交通の要衝であることを理想としたとする。

### 第3章 紀伊国府に関する諸説

文献における紀伊国司の初見は『日本書紀』天武14年(685)4月4日の条の「紀伊国司言、牟婁温泉、没而不出也」の記事とされる。紀伊国司が登場するという事は、紀伊国庁及び紀伊国府が存在したことがうかがえ、この時点においてすでに紀伊国庁が設置されていたことが推定される。

#### 1. 紀伊続風土記・紀伊国名所図会の府中説

また、国府の立地について、㉞内陸盆地に位置するもの、㉟海岸平野または河口付近に位置するもの、㊱湖上交通にめぐまれたもの、の3つに分類し、全国の国府の最も多くを占める㉞の「内陸盆地の国府においては、航行しうる河川の遡航点ということも重要な位置選定の条件」と記している。

次に、国府の規模・構造等について、藤岡氏は「国府はいつ設立されたかは不明である。しかし各国の国府跡をたずねてみると、その位置といい形態といい極めて相類似して、ある時期にある程度まで全国画的に設定された人為的都市であることを知らしめる。」として、ある一定期間に一定の規格で自然発生的ではなく、人為的に形成された都市であるとする。

こうした国府には共通した規格があったとし、藤岡氏は次の点を指摘している。

- ① 国府は正方形のプランをもち、一町毎の碁盤目型をとった。その最大のもは方八町。
- ② 国衙域は国府の中央または北半におかれ、原則として南面していた。
- ③ 都の朱雀大路にあたる中央の南北道路が他の道路に比べて道巾が広い大路をなした。
- ④ 文化・政治の中心地域であり、それぞれの国での豊かな生産の場であり、海陸両様からする交通の焦点、かつは結節点であった。
- ⑤ 集落立地として適切な自然条件、地形的位置を占め、都や郡家・駅家・関などを結ぶ交通の要衝を占有する。
- ⑥ 総社が国府の四隅、または府域に接した府域外の四隅におかれた。
- ⑦ 少なくとも国衙域には築地でめぐらされた建物が存する。

など、国府の立地、構造等の特徴を挙げている。

紀伊国府の所在については、『和名抄』に名草郡にあるとの記述からこれまで現在の和歌山市府中にあるとされるのが一般的であった。『紀伊国名所図会』には「府中神社」についての記述があり、「また白鳥宮ともいふ。土俗當社をさして聖天宮といふ。其いはれをしらず。府中莊府中村のひがしにあり。(中略) 因に云ふ、此地を府中といふこと、按するに〔韻會〕に唐制大州曰府

といへり。皇國のいにしへも、唐の制に倣ひたまふといへば、古代國司の下り館せし地を、國府とも府中ともいへるなるべし。藤原清正などが紀の守にて下りしは、此あたりにや館せしならん。」とあって、府中という地名から國司の館があった場所であろうと推察している<sup>(3)</sup>。

『紀伊続風土記』の府中村の項には、「和名抄國府在名草郡行程上四日下二日とある地即是なり故に今に至るまで古名を存して府中といふ往古は此邊の惣名を直川郷といふ當村國府のありし所なるを以て府中といふ」とあって、『和名抄』にある國府は当地のこととして、同時に國府に関して次の記事を載せている<sup>(4)</sup>。

#### ○國府遺蹟

其地今詳ならず按するに村中に平林といふ少し高き地あり古より無高の地にして掘り耕すものなし此地官府ありし跡ならん當國國府の事三代實録に元慶二年(878)九月廿八日庚申紀伊國司言今月廿六日亥時風雨晦暝雷電激發震於國府廳事及學校并倉屋被破官舎二十一宇緣邊百姓三十三家權掾在宗娣一人掾紀利永妻一人女子一人從男女各一人合六人壓死掾利長男女各一人國掌漢人貞魚合三人震死支解大木倒仆者十餘株と見えたり國府の廢することいつれの時なるか詳ならず(後略)

と見え、元慶2年9月、国庁をはじめ学校、倉屋、官舎などが災害により大きな被害を受け、人的被害もあったことの報告を紹介し、その後国府がいつまで続いたかは不明であるとしている。府中村の項には続いて村内にある府守神社について次のように記す。

○歡喜天社 境内 五十間 百間 馬場  
本社 方二間 拜殿 廳

村中平林といふ所の東にあり按するに本國神名帳に從四位上府守の神あり三代實録に貞觀十七年(875)奉授紀伊國從五位下府中神從五位上とあり府守神府中神は一にして國府を守り給ふ神と聞ゆれば當社若くは此神にやあらん社地古く廣大にして處の氏神と崇むるは此故ならん中古浮屠氏盛にして聖天などいふ名を設けて佛に引入たるなるへし又觀喜天の祭禮といふ事を聞さるに此神には祭禮ありて六月廿八日九月五日古より定まり來りたる由なれば決して府守神にして聖天にはあらざるへし當社の西に天王森といふあり

と記されており、府守神は國府を守る神であり、府守神・府中神は同一の神で後の歡喜天、聖天などでは決してないとする。つまり、『和名抄』に見える名草郡にあったとされる紀伊國府跡は府中村がその地であり、当地に鎮座する府守の神は國府を守る神であったと結んでいる。以上のように、『紀伊國名所図会』、『紀伊続風土記』のいずれもここ府中の地を國府の所在地として想定しているのである。

## 2. 米倉二郎氏の府中説

次に、戦前に紀伊國府の所在について学術的な考察を残されたのは米倉二郎氏の「紀伊國府考」<sup>(5)</sup>で、全国の國府跡の調査から各国府の共通性を見出し、その傾向を掴んで、紀伊國府の所在に迫ろうとした。米倉氏は『和名抄』の名草郡にあるとする紀伊國府は和歌山市の府中であるとするが、國府の近辺には國分寺・國



図1 國分寺と府中(国土地理院地形図に加筆)

分尼寺が存在すべきであるのにその遺跡は遠く東方の打田町(現・紀の川市)・岩出町(現・岩出市)とされ、当初は国府が国分寺・国分尼寺の近くにあったものが移転したとの仮説も検討されたが、「紀伊にあっては現在までの所、国分寺附近に古國府の遺址と認むべき有力な資料は何等存在しない」と述べ、「紀伊國分寺は國府より稍離れて建立された特例と想定する他ない。」と判断された。さらに、府中の立地にも触れて、

府中より南すれば小豆島、中洲を経て岩橋、鳴神に至る。この紀ノ川南岸地方は紀ノ國造の根據地で、日前、國懸兩大神の鎮座ましますを始め、高橋神社、鳴神社等式内の大社が多く、上代の紀伊にあつて最も開明された處である。されば府中の位置はこの上代の文化中心と連絡しやすい地点に選ばれたものと考へられる。尚當時紀ノ川口は入海の情態で國府は舟楫の便をもつ事ができたであらう。南紀地方との交通には水運の役割が大であつたらうから、國府の位置が海濱に近接する事は國內交通の要請でもあり得る。

斯くて紀伊國府は南海道に沿ひ、上代紀伊の文化中心である紀ノ川デルタに近接し、水運の便ある如き所を選んで建設されたものと判断すべきである。斯くの如く奈良平安時代の交通系よりも一層古きものに支配されて占地したと考へられる事は府中の位置が創設以來のものであり、後に轉移したのではない事を自ら證するものと云ふべきである。

と、府中から紀の川対岸の地域は紀國造の本拠であり、古社も多く、また、府中は紀の川を通じて水運においても良好な位置にあるとともに南海道沿いを占めていることから、文化・交通の中心地であつたと位置づけ、前代からの地域勢力の均衡のうゑに國府が占地されたと結論付けて、紀伊國府は当初から府中に置かれたものであり、別の所から移されてきたものではないとした。

府中における紀伊國府の規模については、北は府守神社の北の阪和線付近、南は河岸段丘崖、西は高川、東は府守神社參道が弘西村との村界であり淡路街道(南海道)に直交して南北に一線を画しており、これらに囲まれた東西6町、南北6・7町の範囲と想定し、

この域内は洪積層丘陵上なる為相當の傾斜を免れず、道路、畦畔、溝渠の配置の如きも沖積平野面に於ける如く整然たるものではあり得ないけれども、しかも尚全く無計畫に任意に引かれたものとは見做し難い。否、一町間隔の配列の原型が十分に指摘され得るのであつて、之は云ふ迄もなく條里による町割の遺構である。南北道路の方向を測るに北約二十度東を示し、紀ノ川北岸名草郡のそれと一致する。かくて紀伊國府も諸國のその如く、條里地割の上に一定面積を限つて計畫されたものと考へられる。

と述べて<sup>6)</sup>、府中には条里遺構が残されていて、府中の國府は条里遺構の上に計畫されたと説明している。諸國の國府の例から國府の四隅に鎮座したという總社については、「國府總社に比定さるべき神社は紀伊府中に存在しない。」と述べ、村の北西にある八幡宮もしくは府中神が總社の機能を代行したと想定している。

### 3. 藤岡謙二郎氏の府中説

続いてこの問題を整理しようとしたのは藤岡謙二郎氏で、『和名抄』の「國府在名草郡」は、米倉説を継承して紀伊國府を和歌山市府中に比定している。そして府中の國府推定地について、「方六町域が想定されそうであるが、府中部落の町割は地形図をみても明らかのようにそれは國府の原形態たる方格地割を形成せず、むしろ中世的である」と述べ、「未だに原形を復原するまでには立ち至っていない。」と結んでいる<sup>7)</sup>。

府中においても地形図の観察や現地踏査等により國府の方格地割の発見に努めたが、國府の復原には至っていないと述べ、府中においても國府の具体的な痕跡を発見できず、決め手に欠ける状態であると述べている。面積的には方六町程度の國府域が想定されそうであるが、國府であれば本来あるべき方格地割が明確でなく、周辺の名草郡紀の川北岸条里遺構との関係をも含め複雑な様相を示しており、紀伊國府は府中であつたと推定されるものの具体的な國府域が復元されるには至っていない。

### 4. 寺西貞弘氏の府中説

その後、宮田啓二氏<sup>8)</sup>、山本賢司氏<sup>9)</sup>を経て、さらに一歩進めて紀伊國府を和歌山市府中に求めたのは寺西貞弘氏で、紀伊國府の位置と規模について再検討を行



図2 寺西氏の紀伊国府推定図

っている<sup>(10)</sup>。

寺西氏は『和名抄』、そして『紀伊続風土記』、『紀伊国名所図会』の記述を受け、さらに、米倉二郎氏の研究を検討して、「府中の地が国府の立地条件にかなうものであることを確認」し、「国府の位置を国分寺周辺にもとめるべき」という批判もあるものの、国府と国分寺が郡を異にする例もあることを挙げて、これまでの紀伊国府は現在の府中の地とする説を追認している。

寺西氏はそれまでの発掘調査に基づく成果にも言及し、「全面発掘のなされていない現在において、それはあくまでも可能性を推測するにとどまる」と前置きして、府守社の周辺で8・9世紀の須恵器が分布していること、府守社の北、JR 阪和線の北側で8世紀と思われる平瓦片が採集されているなど指摘し、「府中の地に国府所在地を求めることに、かなり可能性を認めなくてはならない」と述べる。

国府跡の想定について、寺西氏は『為房卿記』の永保元年(1081)9月26日、「廿六日己酉、今日、経国府南路、故参日前・国懸両社奉幣」の記事を引いて、国府南路は当時の南海道と判断、紀伊国府は南海道に添った北側に位置していたとみた。県道の南約80mを東西に走る道が淡島街道であり、この道が府中での小字

の境界線となっていることから相当古いものであるとみられ、淡島街道は南海道であったと推定している。国府域については府中周辺に広がる東10°振れた条里遺構に規定されているとして、北は山裾、西は高川、東は西谷の範囲において6町四方を想定している。

## 5. 中野榮治氏の府中説

続いて、中野榮治氏は「聖天宮の東、弘西・府中の旧村界に南北の明瞭な段となって表れている。このあたりから西南方の平坦な地形は二四～三〇メートル等高線にかけての森脇・東平林の地形のありようからみ



図3 中野氏の紀伊国府推定図

て国庁域方二町の地にふさわしい」と述べて、南は府中集落の段丘線、東は谷筋、西は高川を限界とする方6町を紀伊国府域と想定している<sup>(11)</sup>。併せて、「この付近の道路・畦畔・小字界を検討すると、正方位に近い北三度東を見出すことができる。国府域が正方位を必ずしもとるとは限らないが、段丘下の河北条里の北九度東の線とは(中略)合わず六度の差があって、明らかに異なる地割と考えられる。」と、国府域とその周囲の方格線の角度に相違があることを指摘している。

## 6. 角田文衛氏的那賀郡説

以上のように、紀伊国府府中説が広く研究対象とされてきたわけであるが、これまで明確な国府遺構の発見や国府として想定される遺物の出土がなく、府中説が国府跡として広く認識されるには至っておらず、決

め手に欠けることから、紀伊国府を府中以外に求める考えも戦前から出されている。角田文衛氏は国府と国分寺の位置について、一般的に「國分二寺は二町乃至五町の距離をへだて、相接して存することが多く、國府はこれと約十五、六町を距つのが常の様である」とし、「紀伊國分寺是那賀郡の池田村即ち古的那賀郷の地に在る。昔からこの地に存在したらしく、神護景雲元年六月に見える那賀郡大領外正六位上日置毘登弟弓が國分寺に稲一萬束を献じた記事からも傍證される。然るに『和名抄』に據れば國府は名草郡にあると見える。即ち現在の海草郡紀伊村に比定さるべきことは府中神社とか總社明神によつて明かであつて、其の國分寺を距ること約四里である。しかし、正直のところ國府がもとから紀伊村に在ったか、或いは那賀郷にあつたものが移つたのかを證明し得べき材料は未だ發見されぬやうである」と、すでに戦前において、紀伊国府は元來那賀郡にあって、のちに府中へ移った可能性をにおわせている<sup>(12)</sup>。

## 7. 木下 良氏的那賀郡説

### 第4章 和歌山市府中における紀伊国府の想定

まず、紀伊国府に関して考古学の見解が示されたのは昭和44年の調査で、「府中東半部に8・9世紀に属する遺物の分布が集中する」ことが指摘され<sup>(14)</sup>、漠然とではあるが府中は奈良時代から平安時代前期の時期が想定された。しかしながら、全面発掘ではなかったために遺構やさらに詳しい時期を明らかにするに至っていない。その後の調査においても、国府跡であることを裏付ける成果を得るに至っていないのが現状である。

前章の研究において、紀伊国府跡についていくつかの想定が示されたが、いずれも地形図を用いて国府域を検討しており、多くの情報が省かれて作成された地形図に基づいて国府域を想定するには限界があった。そこで、近年インターネット上で手軽に閲覧できるようになった空中写真を用いることとし、しかも現況では開発による造成や様々な土地利用によって、かつての地形が失われていることから、できるだけ遡った時期の空中写真を利用して、かつての地形を観察するにこした。幸い、戦後間もなくアメリカ軍によって全

歴史地理研究者の多くが紀伊国府和歌山市府中説を唱えるなか、戦前の角田氏の紀伊国府的那賀郡から名草郡への移転説を支持したのは木下 良氏である。木下氏は紀伊国府について単独で論述していないものの、『和名抄』、『延喜式』等の書物にみえる国府の所在地を一覧表にした中に「想定される旧所在地」を掲げ、紀伊国府には「那賀」を挙げている。すなわち、紀伊国府是那賀郡から名草郡へ移転されたとする<sup>(13)</sup>。角田氏のいう一般に国分寺と国分尼寺は近接して造営され、国府も国分寺・国分尼寺と近距離に配置されるのが普通とし、紀伊の場合、国分寺・国分尼寺是那賀郡に所在するとみられているのに対し、紀伊国府を和歌山市府中とした場合、府中は名草郡であり、両者の間は4里(約16km)の距離があつて、むしろ元來の紀伊国府を那賀郡に求め、後に府中へ移転したとの仮説を提唱している。しかし、角田氏・木下氏共に元の紀伊国府を那賀郡に求めてはいるものの、那賀郡の何処に所在したかという具体的な位置には言及しておらず、紀伊国府府中説への対案としては弱いところがあつた。

国を撮影した空中写真が残されており、国土地理院のホームページより閲覧できることから、これを利用して観察を試みた。

この地域は昭和22年にアメリカ軍が撮影しており、これを検討すると中野榮治氏が指摘するように、府中の府守神社や府中集落に残る方格線と、府中集落の南方から東南方に広がる河北条里の方格線とは角度を異にしており、府守神社・府中集落の範囲が周辺から独立した区域にみえる。さらに、空中写真を詳細に検討してみると、中野氏の指摘する府守神社の東側の弘西・府中の村界の南北ラインを東辺とし、ほぼJR 阪和線に沿う東西ラインを北辺とする2町四方の地割の痕跡が認められ(図4-1から4を結ぶ範囲)、おそらくこの範囲が国衙域(国庁域)であつたと想定され、さらにその東・西・南・北辺の2町外側にも区画の痕跡(図4-AからDを結ぶ範囲)が見え隠れしており、この6町四方が国府域であつたものと想定される。従つて、現在の府守神社は国衙域内に存在することになり、国庁が機能しなくなった後に当地に鎮まつたとみられる。



図4 府中周辺空中写真 昭和22年（国土地理院ホームページから）

以上の考察を地形図に示すと図5のようになる。

この国府域の方格線は中野氏が言うように方位に沿った設定に近いが北が東へ $3^{\circ}$  振った設定となっていることが注目される。また、一般に方八町とされる国府域が府中ではいずれの研究者も6町四方との見解を示しているのも注意しておく必要がある。以下、府中の推定紀伊国府跡についての問題点を挙げる。

- ㊦ 国府域の方格線は方位から北が東へ $3^{\circ}$  傾いて設定されている。周囲の条里遺構とも異なる方格線の傾きをもち、方位を意識した初期及び盛期の律令制における国府とは思えない地割である。傾きをもって設定された他の国府の例はあるものの、紀伊国府の設定において傾きを必要とする理由はどこにあるのか問題が残る。
- ㊧ 一般に国府は方八町とされるが、府中の国府想定はいずれの研究者も6町四方と共通しており一般に指摘されている方八町とは規模が異なる。同じ上国である周防の国府跡は8町四方であるのに、紀伊国府では6町四方の国府域では、律令制の厳格な規格に基づいて設置される国府の規模としては不自

然であろう。

- ㊨ 国府と国分寺・国分尼寺とは近距離に設定されるのが一般的であるが、府中の地は国分寺・国分尼寺との距離が約16kmあり、角田・木下氏等の研究者が指摘しているように紀伊国府と紀伊国分寺・国分尼寺との距離に隔たりがあり、特異な事例としてよいものか問題が残る。
- ㊩ 府中は名草郡にあり、東隣的那賀郡は「中」もしくは「長」であり、当時の紀伊国の中心地であると推定され、郡名から察するに国府是那賀郡にあるべきと考えられ、国分寺・国分尼寺も那賀郡に位置しているとされる。
- ㊪ 府中説の場合、国府域を南海道駅路とされる道路が斜めに貫くかたちとなる。駅路は国府の四周の一边もしくは国府の外側を通るのが一般的であり、6町四方の方格地形を南海道駅路は斜めに突き抜けることになるのは不可解である。また、推定南海道以南は国府域の地割は不明瞭で、むしろ、後世に地割を変更した可能性がある。
- ㊫ 一般に国府の四隅に設定されるとする総社の痕跡

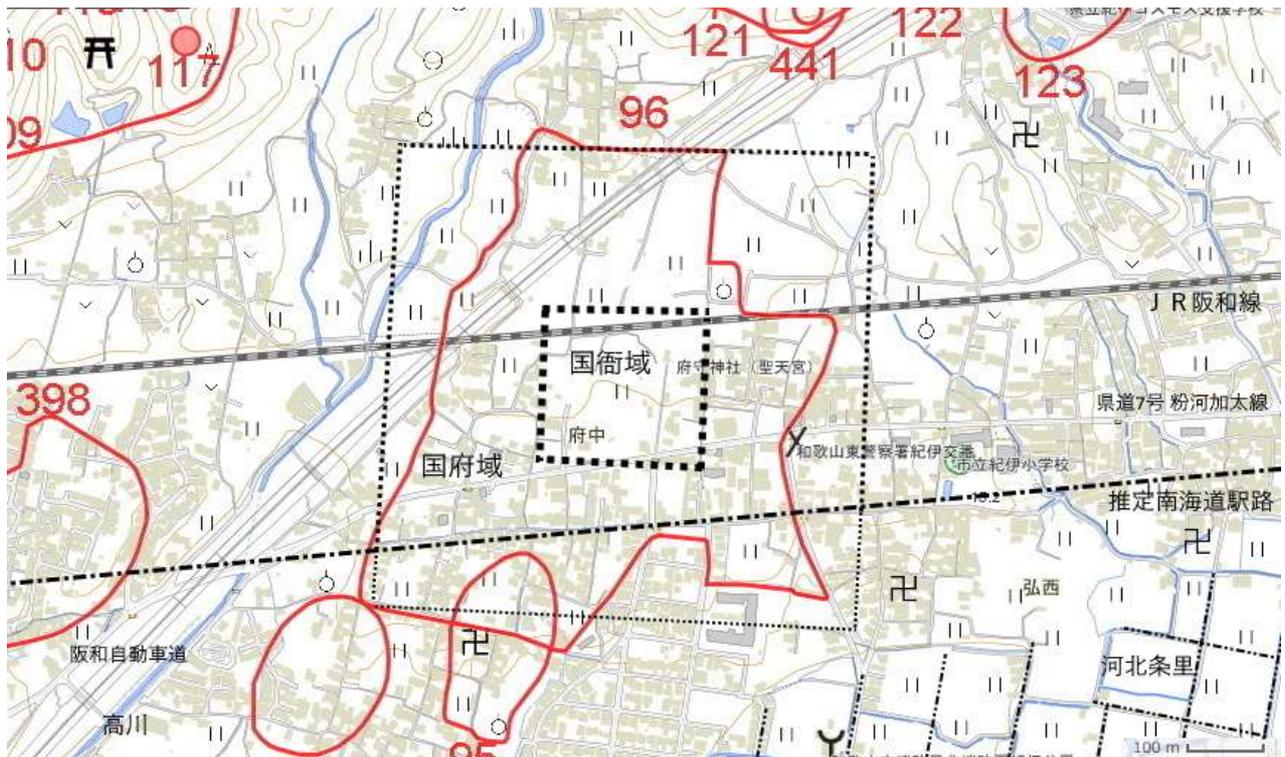


図5 府中国府推定図（和歌山県遺跡所在地図に加筆）

が現況の府中では確認されておらず、府中説をとる研究者も位置的に隔たった神社をこれに充てており、国府内の総社が明確でない。

- ④ 府中の国府域の方格地割が全体に不明瞭で、前掲のように方位から傾きをもち、厳格な律令期の地割によるものとするには問題が残る。

以上のことから、府中の地に国府が所在しなかったとはいわないまでも、厳格な規格により統制された律令期の国府とは考えがたく、可能性としてはむしろ律令制が崩れを見せ始めた平安期の国府跡であった可能性が考えられる。紀伊国は都に近い位置を占め、遷都に

よる都の位置の変化によって紀伊国内の南海道駅路のルートも変化をみせる。そう考えると、国府の位置も駅路の変遷に伴って変化した可能性が高いことになる。具体的には長岡京・平安京に遷都された後、一時的に河内から紀見峠を越えて紀伊へ入り、かつての紀の川沿いの旧南海道駅路に合流するルートから変化し、和泉から雄ノ山峠を越えて南下し、旧南海道駅路に合流するルートに代わったために、国府も府中の地へ移されたと推定される。

では、府中へ移される前の国府について、次章で検討してみたい。

## 第5章 新たな紀伊国府推定地

### 1. 紀伊国府についての考古学上の見解

前に見た和歌山市府中の国府推定地は仮に律令期当初のものでないとすると、府中の国府推定地に先行する国府跡をどこにもとめるべきであろうか。まず、考古学分野で村田 弘氏は西国分Ⅱ遺跡発掘調査の遺跡の性格を検討するなかで、紀伊国府について触れている<sup>(15)</sup>。村田氏は、紀伊国府が平安時代の10世紀以降は和歌山市府中であったことは異論のないところしつつ、初期の国府については角田文衛氏による国分

寺に近い地域に求められるべきとする考えを紹介し、続いて木下 良氏による西国分Ⅱ遺跡及び南に隣接する岡田遺跡の発掘調査<sup>(16)</sup>での官衙的様相の濃い遺構の検出によって初期紀伊国府を両遺跡の地域に比定し、平安京への遷都による南海道駅路のルート変更に伴って現在の府中へ移転したとする説を紹介している。しかし、村田氏は西国分Ⅱ遺跡においては国府跡とするに足る資料は発掘調査において得られておらず、否定的な見解を示している。むしろ、両遺跡と紀の川市東

大井に所在する粟島遺跡とともに那賀郡衙を見出そうとしている。このように那賀郡における国府跡の想定についても、考古学による裏付けは得られていないのが現状である。

## 2. 周防国府の例

ここで他の国府について、国府の所在が明らかとなっている山陽道の周防国府の例をみてみることにする。

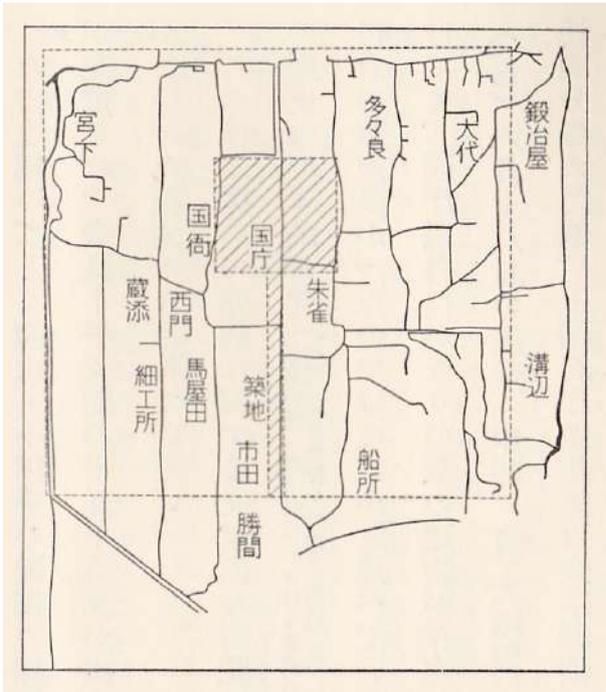


図6 周防国府小字図（『国府』から）

周防国府跡は現在の山口県防府市に所在し、早くから研究が進められ、国府研究の先駆的事例として国府の構造が解明されている<sup>(17)</sup>。周防は紀伊と同じ上国であり、周防国府の例からすると方八町の国府域の中ほど北寄りに、2町正方の国衙域のあったことが明らかとなり、律令制下において、同等のランクである紀伊国府も周防国府と同規模と考えるのが自然である。また、国衙域や国府域内の地割などほぼ同様の構造であるべきと考えられるが、府中は6町四方と規模は小さく、規格から考えても不釣り合いである。前にも指摘したように、府中にはいくつもの問題点をはらみ、学術的には未だ紀伊国府跡として確定されていないことから、角田・木下両氏が唱える「元来の紀伊国府が存在し、後に府中に移転した」ものとする。すなわち「府中に先行する紀伊国府は国分寺・国分尼寺が所在する那賀郡に所在し、平安遷都による南海道のルート

変更のために紀伊国府は府中の地へ移転した」と仮定し、那賀郡内に国府跡地を求めることとした。国府の所在地として適していると考えられるのは、那賀郡内の国分寺・国分尼寺周辺であり、発掘調査の検出遺構や出土遺物などの成果から位置的条件を満たす岩出市の西国分Ⅱ遺跡や岡田遺跡を想定する指摘もあるが、両遺跡では方八町の地割を確認することはできず、大地に残された国府の痕跡の裏付けが得られない状況であった。

## 3. アメリカ軍撮影の空中写真と方八町

そんな中で、昭和22年にアメリカ軍によって撮影された空中写真<sup>(18)</sup>を検討してみると、岡田遺跡の西方約400mの那賀高等学校付近で同校敷地と微妙に重なって2町四方の正方形の地割を発見した(図7、図8、図1~4)。2町四方の北辺からさらに北へ2町の地点で東西に真っ直ぐ延びるラインが地割として認められ、2町四方の東辺・西辺から外側へ3町ずつ隔たったところにも南北に真っ直ぐ延びるラインが地割として確認でき、南辺から南方へ4町のところにも東西のラインが見え隠れしているのが窺える。すなわち、方八町の区画が痕跡として残されているのである(図8A~D)。8町四方が国府域、その中央北寄りに2町四方の国衙域が推定されるのである。また、2町四方の国衙域南辺中央から南方へ軸線が窺え、都の朱雀大路にみたとた南北道路の痕跡と推定される。

ただ、残念なことに当地での遺物等の出土が報告されていない。早くから削平を受けている可能性があるが、推定国府域の東側に隣接する西国分Ⅱ遺跡・岡田



図7 那賀高等学校空中写真(国土地理院ホームページから)



図8 那賀高等学校周辺空中写真 昭和22年（国土地理院ホームページから）

遺跡は発掘調査成果から7世紀後半から8世紀の遺跡とみられており、国府が設置されたとする時期から律令制の盛期にあたっている。国府が平安遷都による南海道駅路の変化により現在の和歌山市府中へ移転したとすれば、国府設置時期から平安遷都による南海道駅路のルート変更までと時期的にはちょうどよい期間となる。となると、推定国府域の東側に隣接する西国分Ⅱ遺跡・岡田遺跡は村田氏の言うように国府そのものでもなく、また、郡衙でもなく、国府域の外側に設置された国府関連施設の可能性が有力となる。ここで、那賀高等学校を中心とする国府域を仮に前期紀伊国府跡、和歌山市府中の府守神社を中心とする国府域を後期紀伊国府跡と仮称することとしたい。

#### 4. 国府想定と方位

上で述べた那賀高等学校周辺を国衙域とする前期紀伊国府跡は方八町の方格地割が残されており、これらの方格線は東西南北の方位に従って設定されたもので、律令制に基づいた古代都市設定の規格に合致しており、方位を意識した都市設計の上に成り立った古代の様相

があらわれている。藤原京・平城京とも東西南北の方位に合わせて方格地割を形成しており、この時期の都市設計の特徴ともいえる。国府は都の都市計画を踏襲し、方格地割を設定して都のミニチュア版とでもいべき都市計画を実施に移している。その結果、国衙域の南辺中央から南方へ延びる平城京でいう朱雀大路が通じていたと想定され、国府域南半を東西に分けていたと考えられる。

なお、国府域北辺の東西ラインは南海道駅路と重なっており、東西の方位に沿って伸び、従って、この部分の南海道駅路も東西の方角にぴったりとのせて東西に通じていたことになる。

#### 5. 地名の検討

『国府』には、周防国府域と現在に残る小字名が図に示されており、8町四方の正方形プランの中、中央北寄り2町四方の国衙推定域内に「国庁」が、その西隣に「国衙」の小字名があり、その南に「西門」が、その西には「蔵添」があり、国衙推定域の南に「朱雀」が、さらに南方には「築地」の小字名があって国府の

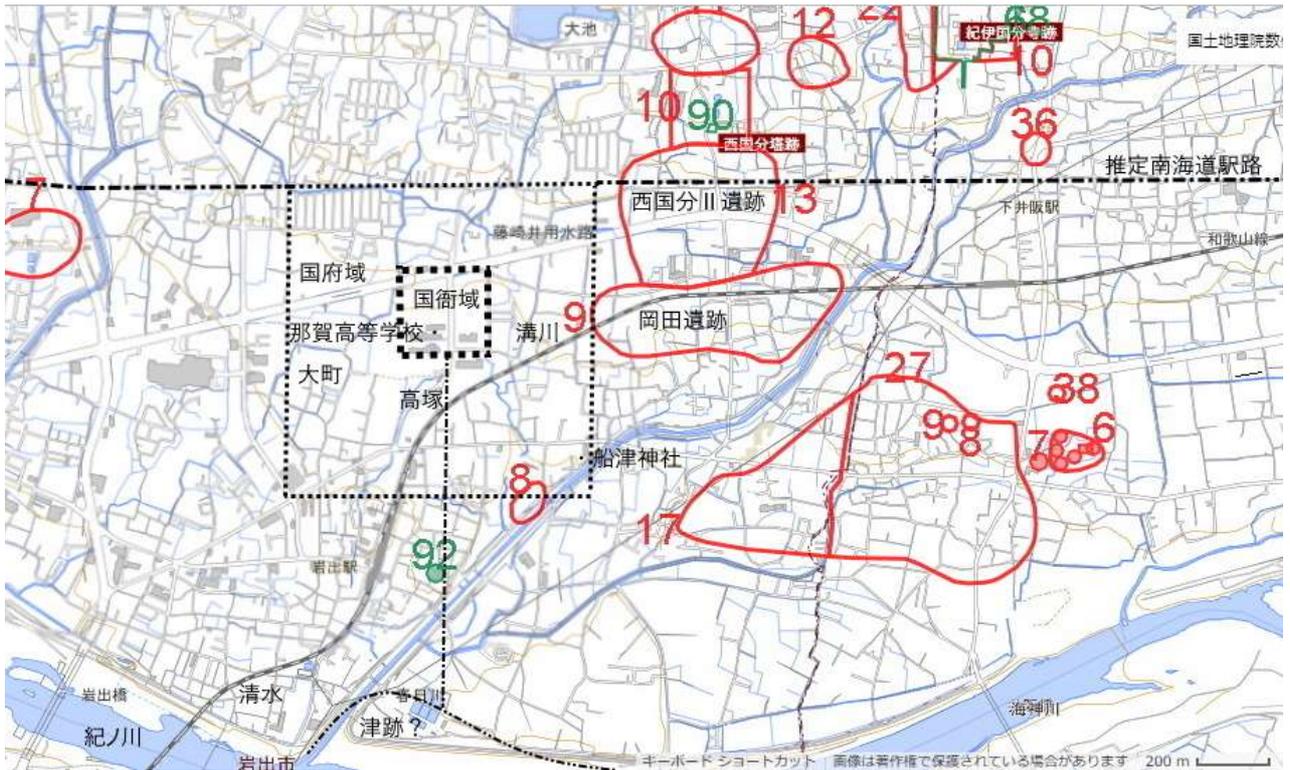


図9 推定前期紀伊国府跡と遺跡（和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図に加筆）

構造物の存在が地名から知れる。また、国府域東南辺には「溝辺」があって、国府四周が溝で区切られていたことが想定される<sup>(19)</sup>。

これに対して、前期紀伊国府跡の南西部には「大町」の地名が、同国衙域東辺と国府域東辺の間に南北に細長く「溝川」の地名が残されている。大町は『紀伊続風土記』には「大町の名詳ならず意ふに此村岩出の渡し場より粉河及根来への街道にて商賣も多く家居町作りなりしより大町と呼びて直に村名となりしなるへし」<sup>(20)</sup>とあるが、国府内への集住により町が形成され、それが地名となって受け継がれてきたと見る方が自然である。また、溝川は周防国府跡の南東部に溝辺という地名が残されているように国衙域の外周、国府域の外周を画する溝が穿たれていた名残と考えられる。溝川が国衙域東辺と国府域東辺に挟まれた南北に長い範囲であるのはこのことを物語るものであろう。

## 6. 紀伊国府と南海道駅路

これまで国分寺の南を東西に通じていたとする南海道駅路は西進して西国分塔跡

の南を直進し、ここで発見した前期紀伊国府跡の北辺に重なり、さらに西進することになる。国府はその国内でも都からの交通の便のよいところに置かれるのが通例であるので、南海道駅路が国府に接し、国府の北辺を通っていたとなれば、その条件にまさしく適合することになる。

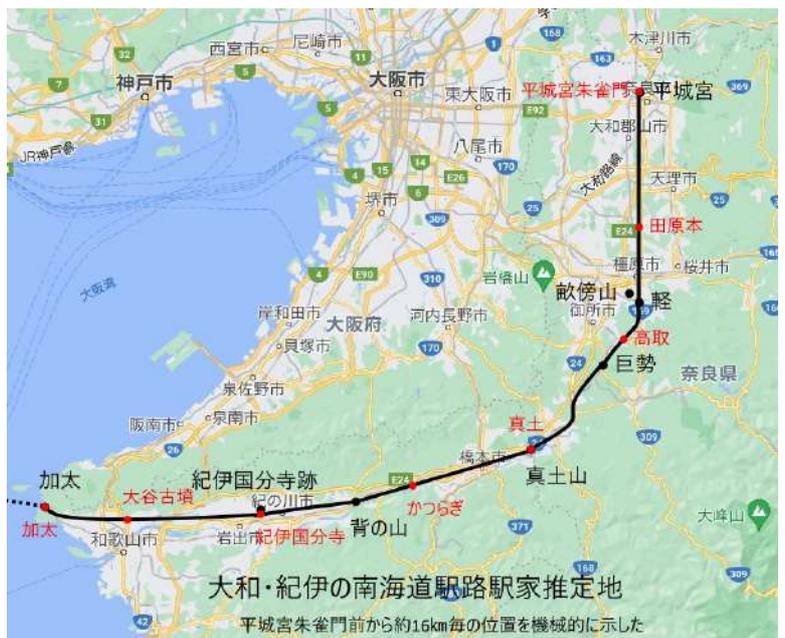


図10 南海道駅路駅家推定地（Google Map に加筆）



図 11 推定前期紀伊国府跡と港津 昭和 22 年空中写真 (国土地理院ホームページから)

南海道駅路は大和の都から真土山を越えて紀路に入り、伊都郡の紀の川北岸を西へ進み、背の山を越えて那賀郡に入る。聖武天皇の玉垣勾頓宮跡、称徳天皇の鎌垣行宮跡付近を経てここ紀伊国分寺に至るとされる。都から直進指向を続けながら当地へは平城宮朱雀門からであれば約 150 里 (約 80 km) の距離となり、30 里毎に駅家 (うまや) が設けられていたことが推定されるので、この辺りに朱雀門から 5 か所目の駅家が設置されていたことが想定される。ちなみに、機械的に距離を割り当ててみると、平城宮朱雀門から最初の 30 里 (約 16 km) は奈良県田原本町役場付近、2 か所目の 60 里 (約 32 km) は奈良県高取町の市尾墓山古墳の付近、3 か所目の 90 里 (約 48 km) は橋本市隅田町真土、4 か所目の 120 里 (約 64 km) はかつらぎ町の役場北方、5 か所目の 150 里 (約 80 km) がここ紀伊国分寺付近、6 か所目の 180 里 (約 96 km) は和歌山市の大谷古墳付近、そして和歌山市の加太から海路となって淡路、さらに四国へと向かうことになる。紀伊国分寺付近に想定される駅家跡については本稿で扱ういとまがなかった。今後時期をみて検討していきたい。

## 7. 国分寺・国分尼寺との位置関係

今回想定した前期紀伊国府跡の南海道駅路を挟んで北東方 300m には国分尼寺跡ではないかと推定されている西国分塔跡、さらに東北東 1.2 km (約 11 町) には紀伊国分寺跡が所在し、南海道駅路の北側に東から紀伊国分寺跡、西国分塔跡が並び、西国分塔跡の南に南海道駅路と西国分 II 遺跡・岡田遺跡が広がり、両遺跡の西側に接して前期紀伊国府跡が所在するという位置関係となる。角田氏の指摘する、一般的に「國分二寺は二町乃至五町の距離をへだてて相接して存することが多く、國府はこれと約十五、六町を距つのが常の様である」と、国府・国分寺・国分尼寺が近い位置関係にあるとする条件をも満たすことになる。

## 8. 総社との関係

さらに正方形プランに設定された国府域の各四隅には総社が配されていたという。前期紀伊国府跡には南東隅の角には船津神社が鎮座している。他の四隅の角では神社は失われてしまったとみられるが、昭和 22 年のアメリカ軍が撮影した空中写真に船津神社とその南東角が春日川の対岸に残されているのが見え、船津神社の前身の総社の範囲が窺えるとともに、さらには国府域南東コーナーのプランが復元できる。船津神社

について『紀伊続風土記』には「祀る神詳ならず一村の産土神なり村民相傳ふ鎌倉より八幡宮の神體流れ来て此所にいます故に船津八幡といひ習はせり昔は回廊舞臺參所寶藏御供所等あり社領も十七町ありしと寛文記に出たり」とあるが、由緒といい、規模といい、これは本来のものが失われた結果、後世に付加されたものであろう。また、社地の南東隅が春日川の対岸に認められるのは、古来春日川の流れが定まらず、蛇行を繰り返した結果、本来一まとまりであった社地が現在のように分断されてしまったものと察せられる。

### 9. 紀伊国府と水運

国府は国内交通の中心地であるだけでなく、物資の集散地でもあることから海・湖・河川の水運に便利な場所が選ばれ、米倉二郎・藤岡謙二郎両氏とも国府における陸上交通に加えて、水上交通との関りの重要性を説いている<sup>(21)</sup>。この地の水運に関する資料は持ち合わせていないが、『紀伊続風土記』の岩出荘の項には、「此荘の村々は總て尋常の農家なれとも宮村清水村は津渡の地伊勢街道筋なれば村居や市街の形をなし旅舎もありて繁昌なり」<sup>(22)</sup>と見えて、前期紀伊国府跡の南側に位置する宮村と清水村は津渡の地と述べている。江戸時代に和歌山城下から紀の川に沿って伊勢へ向かう「伊勢街道」は、ここで紀の川を渡り、北岸を東進することになる。いわゆる渡し場があったところで、渡し場の一方である北岸の宮村や清水村は町が形成され、賑わった旨が記されている。

紀の川渡しと共に注目されるのは、紀の川を上下して物資を輸送する紀の川水運である。

「岩出の清水は文化四年に川積舟八艘を備え、航運活動に従事していた」よう<sup>(23)</sup>、中野榮治氏は「五艘以上をもつ港は川上船の港津と考えられる」<sup>(24)</sup>として、清水を紀の川流域の港津の一つとして挙げており、近世には港津が存在したものとみている。上に掲げた紀の川北岸の宮村・清水村の対岸には船戸村があり、現地形をみる限りでは南北両岸が迫り紀の川を狭めて水流を速めている場所であり、一見、舟への物資の積み降しには不向きで、港津が存在したのかどうか疑問を感じるところである。

しかしながら、昭和22年のアメリカ軍撮影の空中写真<sup>(25)</sup>を観察してみると、春日川が紀の川に注ぎ込む

河口付近にD字状に三角州が形成されていることがわかる。これはおそらく港津の跡と考えられ、のちに春日川が運んできた土砂に埋まった、もしくは埋め立てられたのではないかと推測される。位置関係においても、港津と推定される場所は前期紀伊国府跡の国衙域南辺の中央から都の朱雀大路に見立てた道路が南に向って通じており、これをさらに真っ直ぐ南へ延長した先にあたり、国府域南辺からの距離は約600mと近い位置となる。

清水の港津が史料にみえる近世に突然開かれたとは考えにくく、紀の川水運において、清水は以前から港津の機能を有していたことが考えられ、想像を逞しくするならば、この港津は古代紀伊国府の物資輸送の拠点としての港津であったことが想像される。

### 10. 埋蔵文化財包蔵地との関係

ここに指摘した前期紀伊国府跡の推定地からはこれまで遺物の散布も確認されておらず、遺構も発見されていないため、遺跡として全く把握されてきていない。本考の最大の欠点はここにあり、国府跡であれば何らかの遺構・遺物が発見され、遺跡としてすでに把握されていなければならないところであるが、和歌山県の遺跡所在地図においても埋蔵文化財包蔵地として全くノーマークの区域となっている。しかし、前述のように空中写真や地図、その他資料からはまさに当地が前期紀伊国府跡であると推定されるが、把握されている遺跡の分布状況からは当地が国府跡であるとの裏付けができないところである。

しかしながら、国府域北辺の東端から真東へ約300mの地点で岩出市教育委員会の調査において、東西に通じる南海道駅路の南側の側溝の可能性が考えられる溝が発見されている。「溝の幅は上辺で80~90cm、底辺で25~30cm、深さ10~23cm」と、本来の側溝からすると残りが悪く、相当な削平を受けたものとみられる<sup>(26)</sup>ことから、国府域一帯においても大がかりな削平が行われた可能性があり、わずかに地割として残ったものの、国府に関する遺構・遺物の多くが削り取られた可能性が考えられる。

以上により、前期紀伊国府跡は現在の和歌山県岩出市的那賀高等学校付近に2町四方の国衙域とその周りに方八町の国府域の地割をもって存在したとみること

ができる。しかし、平安京遷都によって南海道駅路が雄ノ山峠越えに変更されたことによって、駅路がこの地を経なくなったことにより、南海道駅路の沿線にある和歌山市府中の地に移転し、そこで後期紀伊国府と

して国府が廃絶するまで存続したものと推測される。その結果、「府中」の地名が残り今日に伝えられたものと考えられる。



図12 前期・後期紀伊国府跡と南海道駅路 (国土地理院地形図に加筆)

## 第6章 おわりに

長らく紀伊国府は確定しないまでも和歌山市府中であろうとされてきたが、府中の国府跡の方格地割は明瞭でなく、一般に国府の特徴とされるいくつかの条件が欠けていた。また、国府域の南部を南海道駅路が斜めに貫通しており、府中の地に国府が存在したろうとは思われるものの、確定には至っていなかった。紀伊国府の研究は、それまで地形図を基本に研究が進められてきたが、本考では、空中写真の活用という新たな手法により、より些細な痕跡を見逃さずに紀伊国府の跡を探索し、平面プランの復元を試みた。

前述の如く、府中国府（後期紀伊国府）跡が律令期の国府跡としていくつもの問題を抱え、律令衰退期の様相を呈することから、必ず先行する国府跡があるはずと探しはじめた。幸い、南海道駅路のルート復元に没頭しているなかで、駅路と国府の関係、また、国分寺・国分尼寺との位置関係など、府中に先行する国府跡が那賀郡内に必ずあるとの信念をもった探索であった。本稿で示した那賀高等学校を中心とする前期紀伊国府跡推定地は、都から通じる南海道駅路との関係をはじめ、いくつもの国府の条件に合致し、前期紀伊国府跡として大方の理解を得られるものと考えられる。

また、東側に展開する西国分II遺跡・岡田遺跡は両

遺跡の営まれた7世紀後半から8世紀の年代は、まさしく国府が設置されて南海道駅路のルートが雄ノ山峠越えとなって国府が移転するまでの期間と一致し、前期紀伊国府の存続した期間であり、両遺跡は郡衙跡との説<sup>(26)</sup>はあるものの、おそらく、国府関係施設であったものと推測される。それでは那賀郡衙の所在はということになるが、西国分II遺跡・岡田遺跡と類似した遺構・遺物が発見されている紀の川市の粟島遺跡が、可能性としては一番高くなるのではなかろうか。前期紀伊国府跡とともに今後の発掘調査の成果に期待したい。

前期紀伊国府が府中の後期紀伊国府へ移転した後、この地がどうなったかはそれを窺う資料は見つからない。東側に広がる西国分II遺跡・岡田遺跡の両遺跡が8世紀を以て廃絶することから、両遺跡が国府関連施設であったとすれば、後期紀伊国府への移転をもって前期紀伊国府は廃絶した可能性は高い。これまで当地での遺物発見もなく、遺跡として認識されなかったこと、前述の岩出市教育委員会の確認調査結果<sup>(27)</sup>等を考え合わせると、当地は大きく削平を受けて耕地化されていったことは容易に想像できる。前期紀伊国府の廃絶後、やがて、国府跡は忘れ去られ、『和名抄』

に名草郡にあると、いかにも唯一の国府跡であるかのように思い込まれることとなった。本考からこのような歴史の流れが復元できるのではなかろうか。

なお、本考察で述べてきた前期・後期紀伊国府跡と紀伊国分寺南海道駅路の位置関係を地図上に示すと図12のように推定される。東方から紀伊国分寺の南側を経て府中へ通じていた奈良時代までの南海道駅路は、平安時代に入ると北方の和泉から雄ノ山峠を越えて南下し、旧来の南海道駅路に合流する(図12一点鎖線)。ところが、南海道駅路が雄ノ山峠越えに変更されると、国分寺等を含む合流点以東の南海道駅路は廃止され、紀伊国分寺付近にあった旧来の紀伊国府は南海道駅路から外れることになったため、紀伊国府を府中の地に移転して、南海道駅路に沿う位置に移したことが想定されるのである。その際、国分寺・国分尼寺は旧来の地に残されたままとされたため、国府と国分寺・国分

尼寺が郡域を跨ぐかたちとなったものと推定される。両紀伊国府跡の規模や構造の違いは律令期と律令衰退期という設置時期の違いによるものと考えられる。

以上、これまで地形図の情報を基本にした歴史地理学の研究成果の上に立って、最近の考古学による発掘調査成果、及び、空中写真による地形図から漏れ落ちた情報を詳細に検討した結果、ここにまとめた結論に至った。諸兄のご批判を仰ぎたい。

本考の執筆にあたり(公財)由良大和古代文化研究協会 泉森 皎、(公財)和歌山県文化財センター 高橋 智也、紀の川市歴史民俗資料館 村田 弘、岩出市教育委員会 窪田雅秀・本多元成、かつらぎ町教育委員会 和田大作、関西大学大学院非常勤講師 額田雅裕の各氏からご教示そしてご協力を賜った。謝意を表する次第である。

## 付論 紀伊国府付近の南海道駅路について

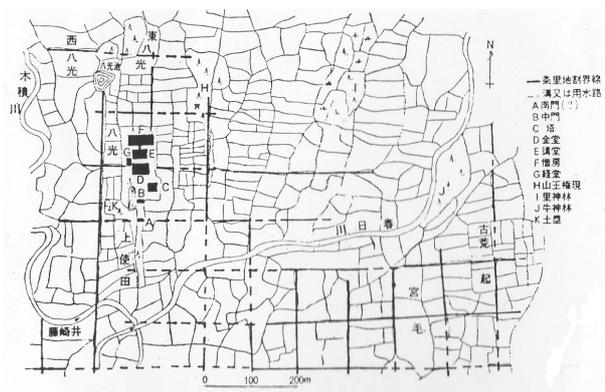
### 1. 紀伊国分寺周辺の南海道駅路各説

本編に示すようにこれまで国府はその国の文化・政治の中心地にあり、水陸交通の要衝を占め、特に官道を経て都から便利な地に置かれたとされ、官道一すなわち駅路一に隣接する位置が選ばれた。紀伊国府も例外ではなく、紀伊国府跡とされてきた和歌山市府中の国府跡(後期紀伊国府跡)も南海道駅路が通じる場所に位置し、今回指摘した岩出市高塚的那賀高等学校付近に所在する前期紀伊国府跡についても、国府跡北辺を東西に通じていたと考える。

ここでは大和に都のあった時期の前期紀伊国府跡に接する南海道駅路のルートについて、掘り下げて検討してみたい。この地域の南海道駅路についてはこれまでいくつかの研究成果が示されており、紀伊国分寺付近のルートは概ね一致している。

服部昌之氏は『日本後紀』の弘仁2年(811)8月の記事にみえる「名草駅」を、『紀伊続風土記』が指摘し、かつ、古川清氏が言うように「近世では和泉国から雄ノ山峠を越えて南進する上方街道と東西走する淡路街道との交点にあたる現在の和歌山市山口市集落に比定した<sup>(28)</sup>。

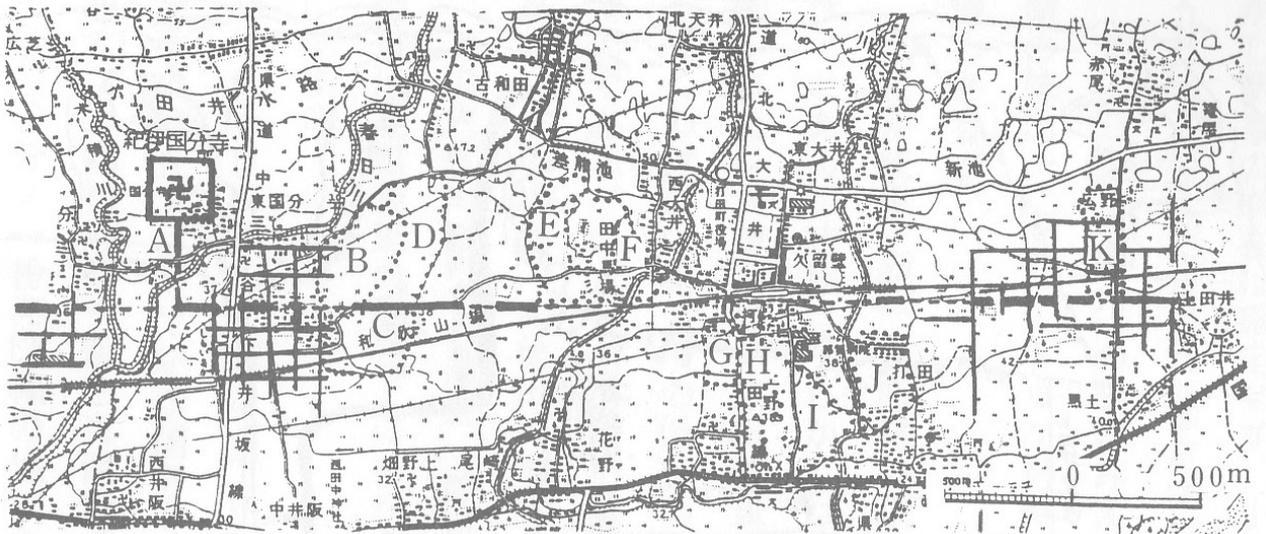
これを受けて、足利健亮氏は、「紀伊国分寺が、打田



(『歴史の道調査報告書II』和歌山県教育委員会) から

図13 紀伊国分寺域周辺と条里界線

町東国分の地の方二町を占めて創建されたことは、確かであると思われる。その西南西 600~700メートルの位置には、いわゆる西国分寺塔跡と称する遺構が残る。この遺構を国分尼寺跡と考える見解もあるが、出土の瓦は白鳳期に遡るもので、国分寺以前からのものである可能性が大きい。」と、前置きして、「近年における古代交通路研究は、各地で、国分寺の南全面を官道が通過したケースを明らかにしている」ことを前提に、「名草駅想定地と二つの行宮付近戸をもっともスムーズに結び、国分寺の南」を通じるルートとして、「国



A 上使田 B 宮毛 C 城賀 D 登り立 E 御所ノ芝 F 八光 G 名賀 H 名草 I 天王 J 八王子 K 登り道 推定南海道(実線・破線)は航空写真と実地踏査による

図14 国分寺付近の推定南海道に沿う小字名と条里地割(『紀伊国の条里制』から)

分寺域方二町の南およそ三町の線上を東西走するルート」を提示している<sup>(29)</sup>。ただし、春日川以西は挿図によると、直進せず、わずかに北へ振るルートを示している。国分尼寺とも考えられている西国分廃寺の南側を通る南海道駅路は西方に向うものの真西ではなく、やや北寄りに傾いたルートを想定している。

続いて、中野榮治氏は、図14の太線で示すラインを南海道駅路と推定している。紀伊国分寺付近では足利氏の説をほぼ踏襲しており、二町四方の紀伊国分寺南辺から南へ3町の東西ラインを南海道駅路と考え、東方へは真東に直進し、現在の打田駅付近でJR和歌山線と交差して同線の南側をほぼ並行して上田井集落へ

向かうルートを設定している。

紀伊国分寺付近の春日川から西方へは図15に示すように、足利氏の推定ルートとは異なり、木積川を越えても真西に直進し、西国分廃寺の大門址の南方1町を真西へ直進するルートを想定している。西国分廃寺に接して南側には西国分II遺跡、さらに南側に岡田遺跡が存在し、両遺跡の発掘調査成果から官衙的な性格が指摘されており、なかでも中野氏は西国分II遺跡を南海道駅路が東西に貫くかたちで通じていたとしている。

方位に沿って東西に通じていたとする南海道駅路は図15に示されている範囲から西方へは根来川付近までそのルートが図示されていないが、図16には南海道駅路は若干北へ振っているルートが図示されている。真西に進んできた推定南海道駅路がどこから屈折するのか明らかにされていないが、両図の南海道駅路の推定ルートを互いの方向に延長してみると那賀高等学校の北約300mで両者が接することになりそうである。さらに、根来川から西方へ約600mの地点をA点とし、そこからそのまま直進する(イ)線と北へ幾分振る(ロ)線の二つのルートが想定されており、「A点から(イ)山崎神社をへて中黒・平岡・藤田を指す吉田条里北七度東と河北条里北八度東条里地割にのる線と、

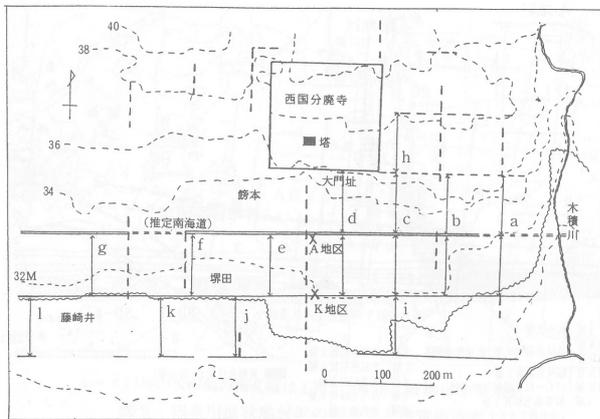


図15 西国分付近の推定南海道と地割(『紀伊国の条里制』から)

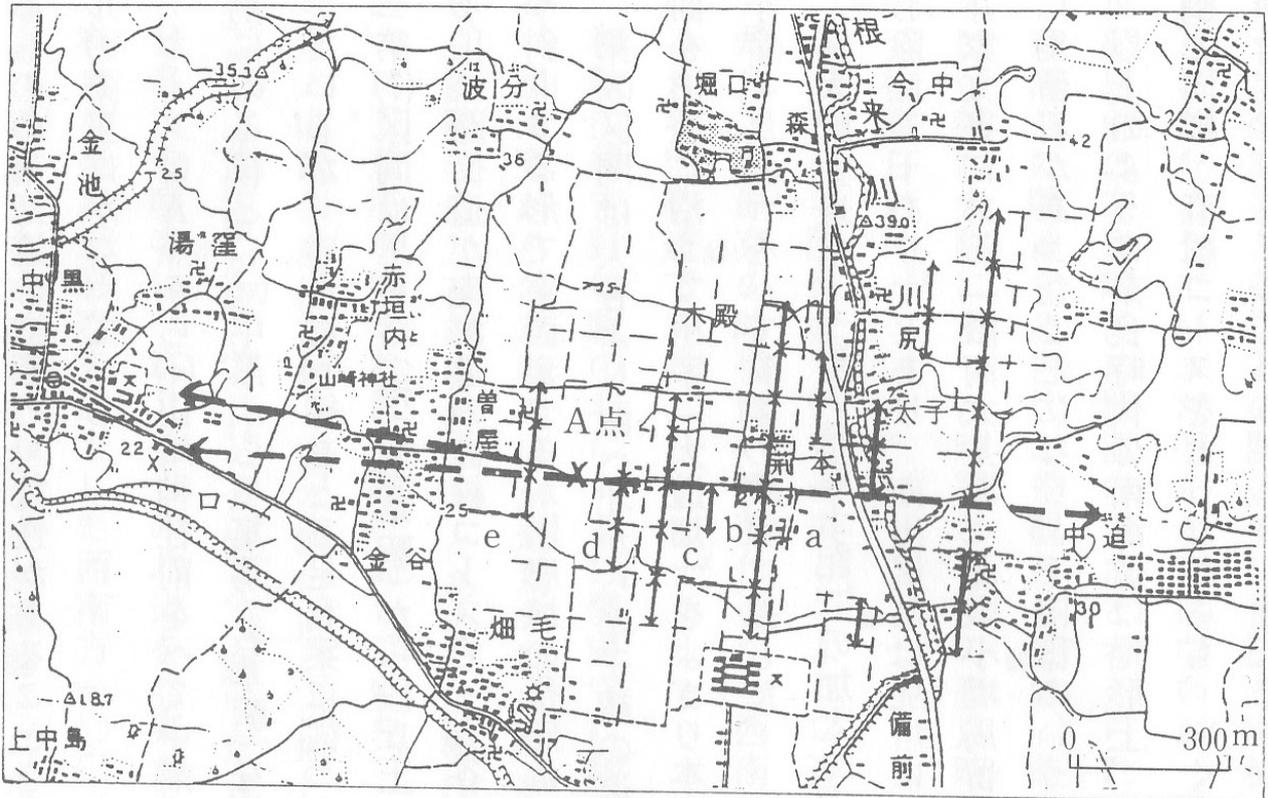


図16 根来川扇状地付近の森条里と推定南海道（『紀伊国の条里制』から）

(ロ)中黒から里集落(名草駅)を指す線が推定される。後者の(ロ)線は河北条里を斜向する問題点をもっているが、いまは(ロ)線をとる足利案に従っておきたい。(イ)線は平安期の古道との関連で検討を残したい。」と述べている<sup>(30)</sup>。

すなわち、中野氏は2町四方の紀伊国分寺域の南辺から3町南を南海道駅路が東西に通じていたとし、そのまま方位に沿って西進し、西国分廃寺の大門址の南1町を進むとする。そして、那賀高等学校の北約300m付近で方向をやや北に振り、さらに西進して根来川の西約600m付近で直進するルートと再び北へ振るルートの2説を想定している。那賀高等学校北約300mは小生が提唱する前期紀伊国府域北辺にあたり、当地点で北折れしたとすると、前期紀伊国府跡北辺中央付近で北折れすることになる。

## 2. 前期紀伊国府跡と南海道駅路

前に見てきたように足利氏、中野氏とも紀伊国分寺付近では南海道駅路は国分寺の南面を東西に通じ、方二町の国分寺域の南辺から南へ3町を通じていたとする。これに代わる説得力ある説は他に聞かないので、この点についてはほぼ定説化しているものと思われる。

問題は東方から方位に沿って国分寺の3町南まで西進してきた南海道駅路が春日川を越えてどのように進んでいったかである。足利氏の図示からは春日川からやや北に振るルートが示されており、中野氏は方向を変えずに真西に直進し、西国分廃寺の大門址の1町南を経て那賀高等学校の北300mの地点に到るとされる。

私見では真西に直進する中野説を採り、本編第5章の10で岩出市教育委員会の試掘調査結果が裏付けとなる。中野説を直進すると推定前期紀伊国府跡の北辺に到るのは前述のとおりであるが、国府域の東端から真東へ約300mの地点において、東西に通じる南海道駅路南側側溝と見られる溝跡が発見されている<sup>(31)</sup>ことである。試掘調査場所は西国分II遺跡のほぼ中央、西国分塔跡の南1町にあたり、南海道駅路がここを通過していたことはほぼ間違いなからう。従って、中野氏の真西に向って直進するというのが妥当と考える。

さらに真西に直進すると那賀高等学校の北約300mの前期紀伊国府跡北辺に重なる。中野氏は北辺中央付近から南海道駅路が北寄りに方向を変えるよう想定しているが、国府北辺中央からわずかな角度で北辺道路から分岐するのは不自然で、南海道駅路は国府北辺と



図17 紀伊国分寺跡と推定南海道駅路（和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図に加筆）

重なり合って直進し、根来川に至ったものと考え。

現在の国道24号備前交差点の北方約500mの根来川合流地点付近で渡河し、ここからやや北へ進路を変えて吉田集落へ向かったものと考え。この付近の南海道駅路は明確でないものの、吉田の西には名草駅家に比定されている里集落があり、この方向にルートを探っていたものと思われる。具体的には中野氏の1町南を並行するルートを想定している。図16で中野氏は一つの条里遺構とみている曾屋・荊本の条里遺構と、畑毛の条里遺構は推定南海道駅路を境にして北側と南側では微妙に傾きと方格線の間隔を異にしており、この間に南海道駅路が通っていたものと推定している。

### 3. まとめ

以上のように、前期紀伊国府跡の北辺を南海道駅路が通じていたものとみられ、それは東西の方位に沿っ

て設定されており、従って前期紀伊国府跡も方位のつたかたちで設定されたものとなる。推定南海道駅路のルートと前期紀伊国府跡、紀伊国分寺、西国分廃寺跡、西国分II遺跡、岡田遺跡の位置関係は図17に示すとおりで、本編において述べたように国府と国分寺が近距離の関係にあり、かつ、国分寺の南面を南海道駅路が通じ、紀伊国府の和歌山市府中での問題点が解消することになる。さらには前期紀伊国府跡の国府域の北辺を南海道駅路が通っていたとなれば、駅路を通じて都から便利な位置関係となり、国府の位置として最適な条件を備えることになる。

前期紀伊国府跡の西方における南海道駅路の推定ルートについては明確な裏付けは得られていないが、紀伊国分寺の南から西進してきた推定南海道駅路が前期紀伊国府跡の北辺に重なりつつ直進するとみられるが、

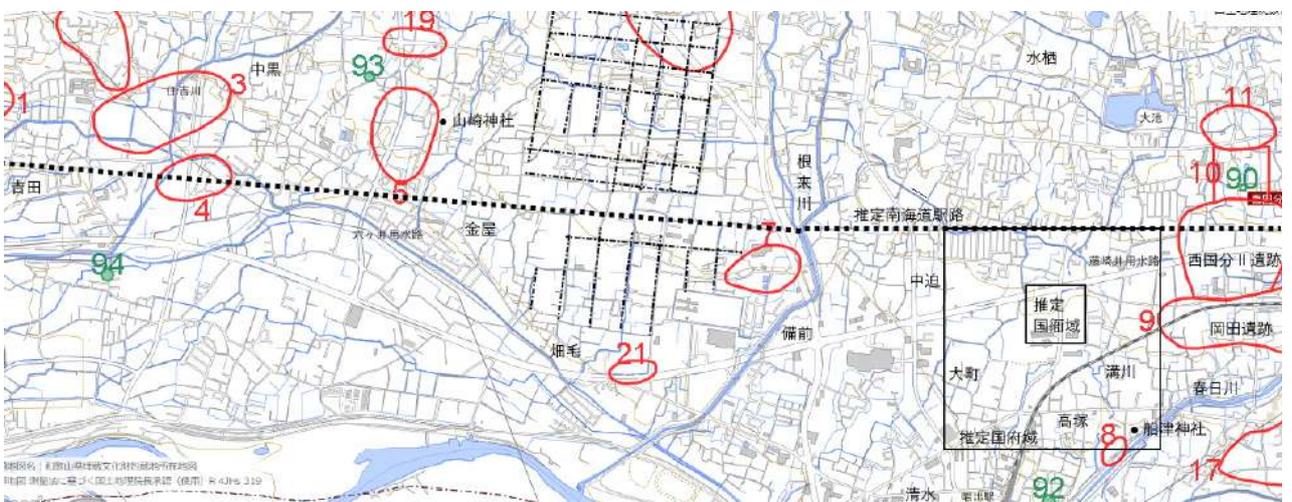


図18 推定前期紀伊国府跡と西方の条里遺構（和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図に加筆）

根来川以西にはさらに直進した形跡は発見できなかった。おそらく国府域北辺の西端もしくは根来川付近で方向を変えたものとみられる。それも前述のように名草駅家比定地の里集落に向ってやや北へ振るルートが考えられる。根来川西岸には条里遺構が残されており、前に触れた如く推定南海道駅路の北と南では条里の角度や間隔に微妙な違いがあり、この間を南海道駅路が通じていたことが想定される。ここでは仮に根来川でやや北に振るルートを示しておくことにする。また、図17に示す範囲から東方、図18に示す範囲から西方への南海道駅路の推定ルートについては機会を改めて述べたい。

南海道駅路の推定ルートについては駅路が存続していた期間のなかでも時期や都の位置によってそのルートに変化を見せる。そのうち都が大和にある時期で足利氏がいう原初南海道（南海道Ⅰ）のルートの復元に取り組みはじめて3年とまだ日が浅い状態であり、紀伊国府跡の研究などは1年に満たないなかで愚考を披露させていただいた。まだまだ不行き届きで決して満足いく内容ではないが、本テーマの研究がさらに深まるためにも先学諸氏をはじめとする研究者の方々のご批判をお願いするとともに、関係場所における発掘調査により本テーマに迫る資料の発見を切に期待するものである。

### 【注】

- (1) 米倉二郎 1939 「紀伊国府考」『紀州文化研究』3-2 紀州文化研究所
- (2) 藤岡謙二郎 1969 『国府』吉川弘文館 日本歴史叢書
- (3) 高市志友 1811 『紀伊国名所図会』巻三 府中神社
- (4) 仁井田好古 1839 『紀伊続風土記』巻之九 直川荘 府中村
- (5) 前掲 (1)
- (6) 前掲 (1)
- (7) 藤岡謙二郎 1969 「紀伊国府と古代の南海道」日本歴史叢書『国府』吉川弘文館 P224
- (8) 宮田啓二 1971 「国府随想」『和歌山市史編纂史料 史料叢書(2)』 P1
- (9) 山本賢司 1975 「紀伊国府の位置と規模について」『学芸』22 和歌山大学 P11
- (10) 寺西貞弘 1981 「紀伊国府遺構式論—その位置と規模について」『和歌山地方史研究』2 P1
- (11) 中野榮治 1989 「紀伊の条里呼称と南海道」『紀伊国の条里制』古今書院 P122
- (12) 角田文衛 1938 「国分寺の設置」『国分寺の研究』上 P90
- (13) 木下 良 1986 「古辞書類に見る国府所在郡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集 P223
- (14) 田辺昭三 1969 『紀伊府中遺跡調査概報』和歌山県教育委員会 P6
- (15) 村田弘 1990 『西国分Ⅱ遺跡発掘調査概報』(財)和歌山県文化財センター P20
- (16) 武内雅人 1981 『岡田・西国分Ⅱ遺跡発掘調査概報』岩出町教育委員会 P30 調査を担当した武内氏は那賀郡衛の可能性を指摘している。
- (17) 藤岡謙二郎 1969 『国府』吉川弘文館 日本歴史叢書 P30、P214、山中敏史『古代の役所』岩波書店 古代日本を発掘する P70。両書とも三坂圭治氏の研究（『周防国府の研究』1933）を基本としている。
- (18) 国土地理院ホームページ「地図・空中写真閲覧サービス」
- (19) 藤岡謙二郎 1969 『国府』吉川弘文館 日本歴史叢書 P30
- (20) 仁井田好古 『紀伊続風土記』巻之三十 那賀郡 岩出荘 大町村
- (21) 前掲 (1)、(2)
- (22) 仁井田好古 1839 「岩出荘」『紀伊続風土記』巻之三十 那賀郡第四
- (23) 山本賢司 2003 「紀ノ川の川上舟と川湊 藩政時代の物流の主役」『定本 紀ノ川・吉野川』郷土出版社 P111
- (24) 中野榮治 1991 「江戸時代の紀ノ川水運」『流域の歴史地理—紀ノ川』古今書院 P115
- (25) 前掲 (18)
- (26) 前掲 (16)
- (27) 本多元成 2022 『岩出市埋蔵文化財調査年報 令和3年度』岩出市教育委員会 P18 この調査を担当した本多氏からは、南海道駅路の南辺を画する溝と推定されるが、溝の底部がわずかに確認できたのみで、大きく削平を受けたと推定されるとのご教示を得た。

【 付論 注 】

- (28) 服部昌之 1978 「紀伊国」『古代日本の交通路』Ⅲ 大明堂 P143
- (29) 足利健亮 1980 「紀ノ川北岸縦貫南海道の復元」『歴史の道調査報告書 Ⅱ 一南海道・大和街道他一』和歌山県教育委員会 P13  
足利健亮 1985 「紀伊における古代駅路の復元」『日本古代地理研究』大明堂 P288
- (30) 中野榮治 1989 「南海道の直線指向と条里」『紀伊国の条里制』古今書院 P42～P46
- (31) 前掲(27)